

研究所

明治学院大学 社会学部付属研究所

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37 TEL 03-5421-5204・5205

だより

34号

メールアドレス

issw@soc.meijigakuin.ac.jp ホームページ <http://soc.meijigakuin.ac.jp/fuzoku/>

contents

- 1 所長ごあいさつ
社会学部付属研究所所長
- 2 調査・研究部門
- 3 相談・研究部門
- 4 学内学会部門
- 5 市民講座報告 / 研修会案内
- 6 2020年度社会学部付属研究所
プロジェクトの紹介
- 7 2020年度社会学部付属研究所
スタッフの紹介

1 所長ごあいさつ 社会学部付属研究所所長

中世ヨーロッパにその原型が誕生して以来、大学は研究と教育の両輪からなる空間である。研究所という名を冠した組織も、大学の一部であるかぎり、教育活動と無縁ではありえない。むしろ研究所にはいわゆる教室は存在せず、籍を置く学生もいないが、研究、すなわち人類の共有財産たる知識と理性を拡張しようとする教員たちの苦闘が土台になれば、大学にふさわしい水準の教育を提供することなどできるわけがない。それゆえ、社会学部教員による研究活動を支援する本研究所の活動は、学生諸君の知的向上をも間接的に支援することにつながっている。

このような大学観は大仰で時代がかったものであり、研究に多くの時間

を割きたい大学教員の自己正当化にすぎないのではないかと疑われる向きもあるかもしれない。だが私がこのような大学観を抱くようになったのは、はるか昔日 (!)、まさに自分自身の学生時代である。学生にとって大学とは言うまでもなく勉強をする (させられる) 場であるのだが、そうした表層の奥にある本質は、それが精神の自由の府であるということである。大学に入って二年が過ぎる頃、私はそれこそが大学の存在理由であると確信するようになっていた。それは現在においても微塵も揺らがない私の信念であり、毎年の学生たちに伝えようとして続けている、ほとんど唯一のことである。

日本における高校までの教育の現状を一律に否定する気はないが、しかし否定すべき大きな傾向があることも否めない。それは、事実を直視し、自ら問いを立て、その答えを考え抜き、得

(中面へ)

られた意見を率直に表明するという、民主主義社会において「あたりまえ」であるべき精神上的誠実さを嘲笑するような態度、一種の知的シニシズムである。たとえば、日本の学校で偏執されている「読書感想文」という奇妙なカリキュラムがある。私のゼミナールに集う学生たちの話によれば、かれらはそこで自分が本当に考えたことを書いたことがないという。そうではなく、変なやつだと思われたいような無難な内容、教師が高い点をつけてくれそうな内容を書くのだ。たとえ課題図書を読んで少しも面白く思えなくても、さも面白かった、あるいは「ためになった」かのような感想をでっちあげ、そこそ

この評価を得ていたというのである。

言うまでもなく、そのような詰まらない作文を、大学教員は高く評価しない。私たちが読みたい言葉は、表層的で無難な一般論などではなく、世界の具体的な細部に分け入り、出来合いの問いと答えが色を失う場所に立ち尽くしながら、新たな知識を全身で受けとめようとする姿勢から生みだされるものであるからだ。そうした言葉は、時に教員にも刺さる刃であるかもしれないが、私たちはそれを心から歓迎する。大学が「精神の自由の府」であるというのは、そういうことである。

(所長:加藤 秀一)

研究所各部門から

2 調査・研究部門

調査・研究部門では、社会学・社会福祉学の調査・研究プロジェクトを実施しています。プロジェクトには、科研費等外部資金研究の準備や補完、講演等企画のための少人数の単年度プロジェクトである「一般プロジェクト」と、両学科スタッフの相当数が参画する2～3年度の大規模共同研究である「特別推進プロジェクト」の2種類があります。

本年度(2020年度)の「一般プロジェクト」の詳細については、本号の「プロジェクトの紹介」をご覧ください。学外者を含む4つのプロジェクトが活動しています。「特別推進プロジェクト」は行われておらず、調査・研究部門スタッフを中心に新たなプロジェクトの可能性を模索しています。なお、本年度は、プロジェクト立案・申請時には予想もしなかった新型コロナウィルス問題により、調査・研究活動に大きな制約が出てきており、各プロジェクトとも計画の修正等が見込まれますこと、ご理解賜りますようお願い申し上げます。

げます。

昨年度(2019年度)は、「宇宙倫理学の基礎研究」(代表 稲葉振一郎)、「歴史社会学的日本研究の国際的対話の発展に向けて—Trans-Pacific Workshopを拠点に」(代表 石原俊)、「グローバル化する日本食をめぐる比較社会学的研究」(代表 安井大輔)、「子ども・消費・地域の現代的構図の実証研究」(代表 元森絵里子)、「団塊世代を含む前期高齢者の生活実態と生活課題」(代表 明石留美子)の5件の「一般プロジェクト」が行われました。これらの成果につきましては、次号『研究所年報』(2021年2月刊行予定)やその他学術雑誌等で今年度中に公開される予定です。

「特別推進プロジェクト」は、「内なる国際化に向けた生活保障システムの再編」の最終年度として、野沢慎司、藤川賢、浅川達人、坂口緑、石原英樹、元森絵里子、鬼頭美江、安井大輔、高倉誠一、米澤旦、三輪清子、阿部貴美子、金成恒(東京大学)の13名で活動しました。「外国人受け入れにかかわる生活保障システムの国際比較」「オールドカマー問題からニューカマー支援への展開過程」「ニューカマー集住地域における子ども・教育支援の現状と課題」

「ニューカマーに対する医療支援の現状と課題」「児童福祉・少年司法における支援の現状と課題」「外国人とダイバーシティ」の6つのテーマに関心が絞られ、各自の多様な研究領域を生かした調査・研究が進められました。最後にコロナ禍による調査断念などが生じましたが、3年間の成果は既刊および次号の『研究所年報』にて報告を予定していますので、お目通しただけでしたら幸いです。

(主任:元森 絵里子)

3 相談・研究部門

社会福祉学科主任を二年間経験する間離れていましたが、大変過ぎる職務を無事に終えた後、三度目の主任になりました深谷です。相談・研究部門は長年勤務された平野幸子さんがご退職となり、またソーシャルワーカーの角田さんがご栄転なさった後、大島さんと末松さんを新任としてお迎えすることになりました。また教員の方も平澤先生、金先生を新しく迎えることになり、主任以外全員新任ということになりました。そのような頼りない主任以外皆新任、という状況の中、コロナ禍で皆出校できない、という一層寄り添うことになりました。新任の職員の方たちは業務の全貌がつかめない中、初めから在宅勤務、という不安な状況を過ごさせてしまうこととなり、致し方ないのですが大変申し訳ないと感じています。

前任の平野さんは、子育て支援という大きなプロジェクトを、時間をかけて育て上げました。その成果の上に私たちは新たなプロジェクトのテーマの方向性を「社会的孤立」とし、引きこもりや外国ルーツの家族の課題、LGBTなどの問題を少しずつ考えて来ました。まだこれという定点を定められず、子育て支援ほど深く掘り下げるには至り

ませんが、じっくりと取り組んでいきたいと思います。

コロナ禍の影響で春学期はイベントを開催できず、秋に市民講座一回、アドバンストコース一回を企画し始めています。アドバンストコースは旬なテーマで、「コロナ禍と家族」のようなことを考えています。イメージとしては様々な福祉実践現場で家族がどういう課題に直面したか、それをどのように支援したかについて、シェアできたらと考えています。市民講座は「外国人労働者が直面する課題と支援」で、これもコロナ禍の中での支援課題等を考えています。三つほどの団体さんを講演者として考えていますが、半日のイベントなので少なくするかもしれません。なんとか秋からは通常の活動が出来ることを祈りながら肅々と準備を進めたいと思います。

(主任：深谷 美枝)

4 学内学会部門

明治学院大学社会学・社会福祉学会は、社会学部の学生と卒業生と教員の3者によって構成されるユニークな組織です。「学会」というと堅苦しいイメージですが、オール明学の楽しい交流の場です。事務局は、社会学部附属研究所内にあります。学生や卒業生から独自の企画が寄せられ、教員も含めて参加できる場となっています。行事自体も明学らしい味のある企画が多くなっており、良き伝統を引き継いでいると言えます。

活動として、前年度実績を紹介します。6月15日に総会、特別講演会、懇親会が行われ、49人の参加者があり、坂口緑先生の「誰がパイプラインをつなぐのか～デンマークの生涯学習政策から考える～」と題した講演が行われました。12月7日には、研究発表会が開かれ、3つの会場で16件の発表に、

106人の参加者を記録しました。9つのゼミ単位での発表と7人の個人発表がありました。これには学部学生のほか大学院生も含まれます。2020年3月16日には学内学会編集の雑誌“Socially”が出版されました。随所に学生や卒業生が登場しています。

部会ごとに紹介します。学生部会では、「シリーズ：メディアの達人「メディアの終焉？」Media is dead?」をテーマに講演会が開かれました。卒業生の戸川貴詞氏と中川綾太郎氏による対談を中心に行われました。同じシリーズで12月17日には「学生たちが、今、学校以外でやるべきこと」の講演会があり、放送作家の鈴木おさむ氏が講演され、121人が参加しました。学生部会では夏合宿もおこなわれ、10月にはゼミサロンも開かれ、春と秋に一度ずつトツカ会議が開かれ学内学会の説明会が行われています。

卒業生部会は、9月7日に横須賀基督教社会館見学会が行われ、松原学長をはじめ60人の参加者を得ました。卒業生も全国から集まり、盛会となりました。現館長の岸川洋治先生、そして会長の阿部志郎先生より講演がありました。楽しく、貴重な1日になりました。また、11月9日には、卒業生部会と学生部会のジョイントで、社会福祉学科卒業生と学生の交流会も開かれ41人参加しています。今後は福祉関係以外の関係業界での交流会も企画していきたいと考えています。

明治学院大学社会学部学内学会は昨年、財政構造等について改革を行いました。生まれ変わった組織として新たな歴史を踏み出しました。在学生、教員、卒業生、それぞれにとって有益な貢献が再生産されますように、皆様のご協力とご理解をお願いします。

(主任：岡 伸一)



▲ 鈴木おさむ氏の講演会



▲ 特別講演会後の懇親会



5 市民講座報告 / 研修会案内

2019年度も「社会的孤立」に着目し、「地域の多様な家族が孤立しないために私たちができること」というメインテーマを継続した。2018年度は、いわゆる「8050問題」と呼ばれる課題と接点がある実践家と共に学ぶ場をもった。その成果を踏まえ、2019年7月には地域の皆さんに向けて、「ひきこもる若者 / オトナと家族の困りごと～いわゆる『8050問題』を考える～」をテーマに地域創り担い手学習会を開催した。2019年5月末に起こった川崎の事件を契機として、『8050問題』は一般的に広く知られる言葉となり、上記学習会には多数の方が参加した。地域住民の方々、支援に接点のある実践家の方々等133名が、KHJ全国ひきこもり家族会連合会理事でジャーナリストの池上正樹氏の話に聴き入った。池上氏からの「価値観革命を」というメッセージを受け、地域で自分たちが取り組めるアイデアを出し合う機会となった。



▲ ゲストスピーカーの池上正樹氏



▲ 「明日から取り組めること」を参加者が記入

「第34回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会」(通称:アドバンスコース)

日時 2020年11月28日(土曜日)
10:00～16:30を予定(新型コロナウイルスの状況による)

内容

テーマ:「コロナ禍による家族への影響とその対応 ～いまソーシャルワーカーに求められる支援力～」(仮題)

新型コロナウイルスの影響で、社会福祉資源が様々な対応をしている。「ステイホーム」によって、家族にいかなる困難が生じ、対応しているのかという視点から、それぞれの現場の最前線で対応する人々の声を共有し、まだ時間がかかることも予想されている今後の対応への糧を見出す。

■話題提供(10:00～12:00)

講師:上記の内容に即し

3名の話題提供者を予定。

■ワークショップ(13:00～16:00)

グループに分かれ、現状と課題の共有とこれからの対応について意見交換と共有

■ネットワーク懇親会(16:00～16:30)

会場

明治学院大学白金キャンパス
(新型コロナウイルスの状況による)

●連絡先

明治学院大学社会学部附属研究所
〒108-8636 港区白金台1-2-37
Eメール issw@soc.meijigakuin.ac.jp
TEL 03-5421-5204・5205
FAX 03-5421-5205

6 2020年度社会学部附属研究所プロジェクトの紹介

■一般プロジェクト

●宇宙倫理学の基礎研究

(代表:稲葉 振一郎)

●施政権返還後の硫黄島民一

故郷喪失者の集団性をめぐって

(代表:石原 俊)

●在日外国人等を対象とする教育・生活支援施策の展開と現代的課題

(代表:坂口 緑)

●恋愛関係の初対面状況における外見機能について再検討

(代表:鬼頭 美江)



7 2020年度社会学部附属研究所スタッフの紹介

所長	加藤 秀一
調査・研究部門主任	元森 絵里子
相談・研究部門主任	深谷 美枝
学内学会部門主任	岡 伸一
所員	稲葉 振一郎
所員	平澤 恵美
所員	金 圓景
所員	澤野 雅樹
所員	金子 充
所員	松波 康男
研究調査員(調査・研究部門)	佐野 智規
ソーシャルワーカー(相談・研究部門)	末松 恵
助手	大島 了
教学補佐	高橋 由加
学内学会部門事務担当	坂口 和容